



運動負荷実験に取り組む参加者(2016年度)



韓国で開催された国際学会での交流(2017年)

多くの学生が参加していたことから、学会期間中は夕食を

このプログラムのメインとなるのは、受け入れ学科となる本学の医用工学科が所有する医療機器を用いた実習である。内容は通常3年生に対して実施している必修の実習をアレンジしたものである。実験を手伝ってこれる本学の学生は全員実習経験済みであることから、韓国からの参加者へのサポートや内容に関するディスカッションについても円滑に行うことができたことが良い方向に作用していた。また、参加したK I Tの学生の中には日本語が話せる学生もおり、日本への興味

交流プログラムの中で様々な面での日韓の「近さ」を感じたあと、国際学会の会場で引率教員や、大学院に進んだプログラム参加者と再会し、互いの研究内容についても知る機会に恵まれるようになった。たとえば、2017年に韓国濟州島で行われた国際学会では、同じく17年1月に実施されたさくらサイエンスプログラムの参加者と再会し、その発表内容について詳しく説明を受ける機会があり、さくらサイエンスプログラムとは異なる側面も知る事ができた。さらには、互いに地理的に近い場所での学会開催であることもあり、プログラム実施時の日韓実施責任者の研究室から

継続的な交流を通じて醸成された日韓の「近さ」

韓国のモウ国立工科大学(K I T)とのさくらサイエンスプログラムを通じた交流を始めたのは2017年1月であった。もともと交流先には知り合いの先生がおり、かねてから専門を同じくする学生同士の交流を考えたため、双方にとって大変有意義な交流となった。



京相 雅樹
(東京都市大学
理工学部医用工学科教授)

東京都市大学の活動報告

科学技術
振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第282回

特別連載II

※現在、さくらサイエンスプログラムは新型コロナウイルスの感染防止のため、海外からの招へいプログラムは行わず、オンラインプログラムのみ実施しています。今回は過去に実施された招へいプログラムをきっかけに醸成された日韓の大学の交流について紹介いたします。

プログラム	
1日目	日本到着 プログラムに関するガイダンス 学生同士の顔合わせと懇談
2日目	実習内容(1)に関する講義、医療機器に触れる実習 実習結果のまとめとおさらい
3日目	日本科学未来館見学による科学技術研修活動
4日目	セルフガイドツアーによる見聞を広める活動
5日目	実習内容(2)に関する講義、医療機器に触れる実習 実習結果のまとめとおさらい
6日目	成果発表会に向けたプレゼンテーションの準備
7日目	成果発表・技術交流会 修了式、お別れ会
8日目	帰国



実習に使用した医療機器と共に記念撮影(2019年度)



韓国への派遣プログラムでKITの学生に説明を受ける(2017年度)

訪問した日本人の学生も、KITの学生も英語でなければいじって話せるレベルで話せるKITの教員



「キュンです!」韓国滞在中の学生交流

ともにするなど、学生交流の輪がさらに広がることになった。

このように、親近感がさらに高まっているところで、2017年度の末にさらに交流を深める機会が訪れた。学内の予算で募集された、学生の海外派遣プログラムに採択されたのである。さくらサイエンスプログラムとは逆に、今度は日本の学生を韓国クモウ国立工科大学に引率し、Department of Medical IT Convergenceに所属する先生方の各研究室で体験の実習を行うことになった。滞在先はメインキャンパス内にあるドミトリに宿泊させていただくようお願いし、学生は大学院生2名、学部4年生8名の総勢10名で訪問した。ここでも、さくらサイエンスプログラムに参加してくれたKITの学生複数と再会することができ、初めて対面する他のKITの学生との橋渡し役をしてくれたため、対面した学生さんとはすぐに打ち解けて話せる間柄となった。

学生も少なくなく、コミュニケーションにはさほど困らなかった点も、短い滞在期間の間に親密度を上げる方向に作用していた。

また10名が各研究室に分かれて行った研究体験活動では、所属する学科で学ぶ分野とは異なる新しい分野の研究に触れることができたよう、参加した10名の学生には非常に良い経験となったのではないだろうか。また、大学のあるGumi市からそれほど遠くない距離にある大邱市に出かけ、見聞を広めた。その際、さくらサイエンスプログラムに参加してくれたKITの学生さんは終日日本からの一行に付き合っており、一緒に市内を案内してくれたことを非常に感謝している。

さくらサイエンスプログラムをきっかけとしたイベントを経て、両校の教員と学生は、互いの大学を訪れ、両国の文化に触れ、大学の様子を見聞し、教員と学生の人となりを知って、親密な関係を構築することができた。その後、2019年1月、20年1月に同大学とさくらサイエンスプログラムを実施し、また国際学会の場での両校の学生交流も続いており、さらに関係が強化されていることを実感している。現在は「国境を意識せずに一知り合いの先生と学生さん」という間柄になっており、この関係を今後も大事にしていきたいと考えている。